

---

# 自殺屋-新たなる客人-

桶十芭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自殺屋 - 新たななる客人 -

### 【Nコード】

N6606B

### 【作者名】

桶十芭

### 【あらすじ】

不思議な店の、新たな物語。また客人が訪れる。自殺屋続編です。続けてくださいとお声が多く、とても嬉しく思い続編を執筆することに致しました。読者様方のご期待に沿えるよう頑張っていきますのでよろしくお願いします。

## 一冊目：自殺

死は万人に訪れるものである。

死は神が決めた運命である。

人間はそれに従う使命を負ってこの世に生を受けるのである。

運命に逆らう術は、何人たりとも持ちえない。

それでもその運命に逆らおうとする店が、存在する。

### 自殺屋

\*\*\*\*\*

古めかしい住宅地の中に、一際古そうな店が佇んでいた。

磨りガラスと木材で出来た引き戸が、ほんの少しだけ開いている。

ゆっくりと手をかけて戸を開け中に入ると、一人の男がただ黙って静かに座っていた。

目が合うと、ゆっくりとその口元を笑みの形に変える。

「いらつしやいませ。どうぞお掛けください。ここは自殺屋です。貴方の為に本をお貸し致しましょう」

そして男は本を開く。

『自殺』

File 1：東京都 / 18歳 / 男性  
大学に落ちた。

もう俺なんて生きていても意味がない。  
高校でも失敗して私立にいったのに、浪人までしてこれ以上親父や母さんに迷惑はかけられない。

どうせ生きていてもなんの役にも立たないなら、せめて死んでこれ以上周りに迷惑をかけない。

それが今俺にできる、一番の親孝行。  
ごめん、親父、母さん。

File 2：千葉県 / 15歳 / 女性  
辛い。

学校に行けば皆からいじめられて、家に帰ればお父さんが私を殴ってくる。

こんなに痛い辛い思いをするなら、死んでしまっほうが楽。  
もう誰も信じられない。

お母さんはどうして私を生んだの？

捨てるなら生まなければ良かったのに。

もう耐えられない。

もう二度と人間になんか生まれたくない。

File 3：兵庫県 / 21歳 / 男性

何もうまくいかない。どうして俺ばかりこんな目に遇わないといけないんだ。

俺は何も悪いことなんてしてないのにどうしてこんなに責められないといけないんだ。

こんなろくでもない人生、とつとと終わらせてやる。

File 4：福岡県 / 25歳 / 男性

鬱と診断された。

何もする気が起きない。体がだるい。

こんなこといつまでももしていても仕方がない。

薬のせいで頭が痛い。

俺なんて生きていても意味がない。

もう、疲れた。

これはほんの一部ですが、これまでに自殺をした方の遺書です。

手紙に書いて遺せるならば、なぜ誰かに話せなかったのでしょうかね。

苦しい気持ちを持ったまま、なぜ逝ってしまったのでしょうかね。

この本は彼らが生きていた証拠です。神に逆らえなかった、哀しき証です。

貴方はこれを書かずに済むと良いですね。

自殺を、するのですか？

二冊目＋第一章：立寄（前書き）

初投稿から二か月も放置して申し訳ありませんでした…。オフに余裕ができた時に更新していききたいと思います。

## 二冊目＋第一章：立寄

穏やかな一日の始まり。

寒かった冬も通り過ぎ、段々と春が近づいてきた。

桜はまだ咲かないものの、暖かい陽射しが落ち、草の薫りを乗せた春風が吹き抜ける。

決して広いとはいえない路地裏に、他の民家に混じって佇む一軒の古びた店。

木の枠に擦りガラスのはめ込まれた引き戸が開き、中から男が姿を現した。

真っ黒な着物を羽織り、頭には同じように真っ黒な帽子を目深に被っている。

男は店の中から看板を出し、青々とした空を見上げて呟いた。

「いい天気ですね」

憂鬱だ。

明るい街とは反対に、朝からぐったりとした顔で歩く男がいた。アイロンもかけていない皺だらけのワイシャツに、くたびれたグレーの背広。

顔色は青白い。

男は十メートル歩くことにため息をつき、ずるずると体を引き摺るように人の波を抜けていく。

「面倒臭いな……」

誰にも聞こえないような声で呟き、男は道の端に寄って足を止めた。壁に寄り掛かってぼうつと雑踏を眺める。

なにもかもが面倒臭かった。

体が怠く、仕事に行く気になれない。

「…死んじまうか……」

虚ろな目でぼつりと呟くと、男は一度腕時計を見て再び歩を進め始めた。

街を抜けて人気の少ない路地に入る。

しばらく歩くと、ポケットの中で携帯電話が振動した。

画面を確認すると、会社の同僚の名前が表示されている。

恐らく来ないのを心配しているのだろう。

男は一度は出ようとしたものの、考え直して通話終了ボタンを押した。

静かになったそれを再びポケットに戻し、またゆつくりと歩き始める。

見たことのない景色の道に入ると、古びた家屋の前を一人の男が箒で掃除していた。

竹箒のかしゃかしゃという音が妙に心地良い気がして足を止める。

すると、掃除をしていた男が顔を上げてそちらを向いた。深く被った帽子の下に、少しだけ瞳が見える。

「こんにちは」

「……どうも」

お互いにぺこりと会釈をする。

暫く固まったままで見合っていると、男は箒を家屋の壁に立て掛けながら口を開いた。

「お仕事に行かれるのですか？」

「あ………いえ……」

手に持った黒いバッグに視線を落としてゆつくりと小さく首を横に振る。

まさか自殺をしに行くとも言えず、口を固く結んだ。

その様子を見て、男は引き戸をからからと開けてそつと手招きをした。

「少し寄って行きませんか」

突然の誘いに困惑しながらも、別に急ぐこともないかと男の方に向かった。



扉の近くに古い看板。

自殺屋と書かれたそれが、風に吹かれてキィと音を立てた。

店の中は殺風景だった。

あるのは、小さなカウンターと黒い革のソファ、それと本棚。男の背丈よりも大きな本棚が、店の奥の暗闇へと続いていた。

「あの…ここって何屋なんですか？」

「ここは、自殺屋です。私はこの店の店主です」

店主の言葉に、男は驚いたように眼を見開いた。

インターネットで自殺屋というものの紹介をみたことがある。

つまりここは、自殺を勧める店なのだろうか。

「勘違いなさらないでくださいね。ここは自殺をお勧めする店ではありません。自殺について知っていたただくための店です」

「自殺について…知る？」

「…自殺をなさるのですか？」

突然の店主の問いに、男は戸惑った。自殺を考えたのは本当につきさっきのことであり、当然誰にもなんの相談もしていない。

ましてこんな見ず知らずの人物に、たとえずっと前から自殺を考えていたにせよ、話すはずがないのだ。

「ど…どうして…」

「自殺は悲しい行為です。なぜ自ら命を断とうとするのか…それはとても勿体無いことです。…よろしければ、店を借りてはみませんか」

## 二冊目＋第二章：幸（前書き）

久しぶりの更新です。

前回からかなりの時間がたってしまいました。

待っていてくださったかたには本当に申し訳ないです。

オフが落ち着いてきましたので、これからは出来るだけ更新をしていきたいと思えます。

## 二冊目＋第二章：幸

幸福を探すより、不幸を探す方が簡単である。

「どうぞお座りください」

店主に促されるまま、男はソファに腰を降ろした。革の冷たい感触が、手の平を伝う。

男が膝の上で手を握り合わせたのを見てから、店主はソファの向かいにあるカウンターに向かった。

古びた椅子がぎしりと軋む音が店内に響く。

「さて……様」

沈黙を破った第一声が、自分の名前を言い当てる一言だったことに、男は背中を跳ねさせて驚いた。

つい先程出会ったこの男に、名前を言った覚えはない。

驚きと妙な恐怖に表情を歪ませる男に、店主は微笑んで一枚の紙を出した。

「申し訳ありません。実は先程、貴方の鞆からこれが落ちました」

店主が差し出したのは、男の名刺だった。本来ならこれで驚きも恐怖も消えるのだろうが、男はどうしても店主に対しての違和感を拭いきれなかった。

何かが、何かはわからないが、おかしい。

「お返し致しますね」

店主から差し出された名刺を受け取ると、それがぐにやりとやわらかく感じられた。

指と名刺が溶け合ってしまうような感覚に、思わず手を離す。

ぱたりと音を立てて床に落ちたそれは、硬かった。

恐る恐る手を伸ばして拾うと、もうそれは『名刺』だった。

「どうなさいました？」

「…いいえ、何でも…あの、それで…どうして俺を？」

男の質問に答える前に、店主は立ち上がり本棚に向かった。

一つ目の棚の一番上から、一冊の本を取り出す。

「ここは先程申し上げたように、自殺について知って頂く為の店で  
す。貴方のように自殺を考える方にこの店を貸し出し、これらの本  
を読んで頂きます」

店主が持っているのは、黒のハードカバーに、赤い文字で『自殺と  
は』と書かれた分厚い本。

厚さからして、500ページほどだろうか。

「本を…読む？」

「はい。ここにある本は、全て自殺に関する本です。これを読んで  
貴方が自殺を考えなおすか、そのまま自殺をなさるかはわかりませ  
んが」

中々過激な言葉とは反対に、店主は穏やかに微笑んでみせた。口元  
は笑っていても、その眼に光は無い。

それでも恐怖は感じなかった。感じるのは、恐怖よりも寧ろ哀しさ。  
「…でも、俺もう疲れてしまっただんです。毎日同じことの繰り返し  
しで、会社に行けば上司にこき使われるし…もっと幸せな人生  
を送りたかったんです」

「…誰でも皆そんなものですよ。一日一日、大体同じようなサイク  
ルで回っていく。そのサイクルの中に、時折大きなイベントが起こ  
るのです。人生とはそう作られているのです」

そう言われても、男は納得できなかった。毎日同じことの繰り返し  
ならば、この先生きる意味は何なのだろうか。

「それなら、どうして俺たちは…人間は生まれてくるんですか」  
おもしろくもない人生を送るために生れてきたわけではない。

この世に存在するからには、何か自分の存在理由が欲しかった。

「生きるためです。この世に存在するために。この世で、この世界  
で心臓の音を響かせるために、私たちは生まれ、毎日を過ごすので  
す。…それよりも大きな理由がお在りでしょうか？」

生きることが、存在理由。男は店主の言葉に目を見開いた。そんな理由は聞いたことがない。

何でも勝ち組と負け組に分けられる世界。

何か人とは違う存在理由、この世に特別な形で必要とされることが、生きることだと考えていた。

特別な存在理由をもつ人間が存在するとしても、この世に生まれた人間が共通のものとして持っている、理由。生きる こと。

この世に生を受けた人間が、背負った使命。

そして必ず訪れる死。それもまた、使命。

そのどちらも全うすることが、本当の存在理由なのではないだろうか。

「…生きる、こと」

「…幸福でないことは、不幸ですか？不幸でないことは、幸福ですか？…それは、貴方が判断してください」

「…！」

名前を呼ばれて振り返ると、そこには息を切らせながら走ってくる同僚の姿があった。

気づけばいつの間にか、たくさんの人で溢れ返る街に戻ってきている。

「お前何してんだよ！携帯も連絡つかねえし！部長めちやくちや怒ってるぞ！」

「……………なあ」

「なんだよ」

「…お前さ、今幸せ？」

唐突な男の問いかけに、同僚の男は全くわからない、といった顔を見せる。

頭でも打ったのかと心配そうに首を傾げながらも、うーんと唸り声

をあげた。

「いや、幸せ…ではないかな」

「じゃあ不幸か？」

「……………不幸、でもないな」

なんか変だぞ、大丈夫か？と訝しげに顔を覗き込んでくる同僚の顔を一度見てから、男はよく晴れた空を見上げた。

自然と口元が笑みの形に変わる。

自殺を考えた自分が、馬鹿らしくなった。

「そうだな、不幸じゃないな。毎日同じだけど、それも一瞬しかない時間だもんな」

生きること。

それは人間が抱えた、最大の存在理由。

二冊目 完

### 三冊目＋第一章：暴力

死んでしまいたい。

「お前きもいんだよ！」

「まじウザい。消えて」

「っーか生きててもしょうがないんじゃない？あははっ！」  
いつものごとく少女に残酷な言葉が投げつけられた。

この中学に入学して、もうじき丸二年。少女へのいじめは悪化する一方だった。

少女は病弱で、小学校にまともに通うことができなかった。

毎日病院に通いつめ、同年代の子供たちと触れ合う機会の少なかつた少女には、友達というものはいないに等しかった。

ようやく来られるようになった、あんなにも来たかった学校。そこでの、孤立してしまった少女へのあまりにも残酷な仕打ち。

少女は毎日ぐったりと肩を落としながら学校に通っていた。

学校の帰り道、うつむいたまま歩く少女を突然数人の女子が囲んだ。

「あんたさあ、いい加減学校来るのやめたら？何しに来てんの？」

「いじめられに来てるわけ？きもーい、それマゾっていうんだよ」

「うわ、ブサイクなうえにマゾって最悪ー」

帰り道くらい穏やかに家に帰らせてくれないかと、少女はうつむいたまま小さくため息をついた。

「きもいブサイクは家にこもって肌のケアでもしてればー？無駄な努力だけど！きゃはは！」

そこまで他人に言われなければならぬ理由がわからない。生まれてくる人間はそれぞれ姿形が違って、それを選ぶことは許されないのだから。

すべての言葉を無視して少女が歩きだそうとすると、後ろに立っていた女子が鞆の紐を引っ張って少女を道に押し倒した。

「無視すんなよ！そのでこぼこの顔、叩いたら少しはマシになるんじゃない！？」

少女の腹の上に馬乗りになって、思い切り顔を叩き始める。それを合図にしたかのように、他の女子たちも一斉に少女に暴力をふるい始めた。髪を引っ張ったり、体中を殴ったりを繰り返す。

陽の暮れ始めた人気の無い道に、少女の叫び声と暴力をふるう音が響いた。

五分ほどそれが続いたとき、少女は力を振り絞って腹の上の女子を突き飛ばし、すぐに立ち上がって駆け出した。

後ろから罵声が飛んでくるが、そんなものは聞かずに走り続ける。追いかけられる恐怖に震える足を無理やり動かして、細い路地裏に逃げ込んだ。

表通りでは、少女を見失った女子たちが大声で喚いている。

少女はその声を聞きながら、痛みと恐怖で震える体を抱えて息を殺していた。

「もういや…なんで…助けて…死にたい……」

女子たちが諦めて帰ったあとも、少女は一人道端に座り込んで震えていた。

その手には、購入したばかりのカッター。シャツの袖を捲り、その細い手首に刃を押し当てる。

引かなければ切れないカッターは、皮膚をへこませるだけで、冷たく鈍く光っている。

「う……う……」

少女は腫れた目から大粒の涙をこぼしながら、思い切ってカッターを手前に引いた。

恐怖で力が抜けてしまい、浅く切れただけだったが、少し血がにじむ。

じわりと、そこに痛みが訪れた。手首に心臓があるような感覚。ど



んどん怖くなって、カッターを地面に落とす、血の滲む手首をおさえる。

「痛い…怖い…死にたいよ…」

### 三冊目＋第二章：逢（前書き）

前回からまたかなりの時間が開いてしまったこと、お詫び申し上げます。未だに前作を読んでくださる方が多くいらっしやることに感謝いたします。評価にはすべて目を通させて頂いています。評価に対して、本当に必要なものに対して以外は、誠に勝手に申し訳ないのですが、返信はなしにさせて頂くことにしました。小まめに返信できないこともありますので、本当に勝手なのですがどうぞご了承ください。ですが目はしっかり通させて頂きます^^ では、長くなりましたが第二章の続きです。

### 三冊目＋第二章：逢

オレンジ色の太陽が完全に姿を消し、代わりに建物で隠れた地平線から月が姿を現していた。

少女は未だに路地に座り込んで震えていた。その足元には、刃が数センチ出たままのカッター。

「……怖い…なんで私なの…嫌…死にたい…」

少女はすでに血の止まった手首をおさえたままでうわ言のように呟き続けた。顔色は真っ青になり、手は冷え切って血の気が引いている。

きつと明日学校に行けば、今日逃げたことを咎められ、何かと文句をつけられていじめられるのだろう。恐らく、今日よりも酷く。考えただけで体の奮えは止まらなかった。

学校には行きたい。しかしいじめられたくはない。

それでも、学校に行けばいじめられる。

少女はそこで、考えるのも嫌になって、体を丸めてうずくまった。

母親は心配しているだろうか。父親は仕事から帰る頃だろうか。

痛む体をおさえたまま、少女は立ち上がるうと足に力をいれた。しかし、散々暴力を受けた体は、なかなか言うことを聞いてくれない。足首に痛みを感じて、再びその場に座り込んだ。

悔しさと悲しさでまた涙が溢れてくる。

「うつ…うつ…ひつ…ひつ…お母さん…お父さん…死にたいよ…」

こんなことならいつそ病気で死んでしまえばよかったのにと、手術痕の残る脇腹を数回殴った。そんな痕よりも、今は叩く腕の方が痛むことに、少女は余計に悲しくなった。

「もう嫌…死にたい…自殺したい…」

「どうなさいました」

俯いたまま嘆き呟く少女に、一人の男が声をかけた。少女は咄嗟に顔を上げる。

そこに立っていたのは、真っ黒な帽子を目深にかぶり、同じく真っ黒な服を着た男。

年齢はおそらく、30代くらいだろうか。

突然声をかけられたことに少女は戸惑い、何も言えないままただ男を見つめた。

「大丈夫ですか？」

そうもう一度声をかけ直した男が、傷痕の残る手首を見ているのだと気づいた。

焦って手首を隠す。再び俯いた少女に、男は屈んで静かに手を差しのべた。

「すぐそこに私の店があります。とりあえず行きませんか。もうだいぶ空気が冷たくなってきましたから」

全身黒尽くめで、一般的に考えれば明らかに怪しい人物なのだろうが、少女はなぜか自然にその手をつかんでしまった。

まるで何かに縋るように。

「どうぞおかけください」

そういつて示された、革製の高そうなソファに、少女は黙って腰をおろした。

男はカウンター横の古めかしいストーブに火をつける。そして、一度店の奥へと姿を消してしまった。

一人にされた少女は、今になってのこのことついてきたことを少し不安に思い始めた。

知らない人について行ってはいけないなどということは、今どき小学生でも知っている。

しばらくして、男は木製の箱を持って戻ってきた。そして何も言わないまま、少女の前に座る。

すっと手を伸ばされて、少女は思わず体をびくりと跳ねさせた。その様子を見て、男は帽子を取り、にこりと優しく微笑む。

「大丈夫です。手を貸してください、消毒しないとばい菌が入りま

すから」

そう言われて、少女は恐る恐る手を男に差し出した。丁寧に手当をしてくれる男の目を、じっと見つめる。

普通の人間とどこか違う。その目には、あまり光が感じられなかった。

微笑んでいるはずなのに、どこか寂しそうな瞳。

「ここは切ってもなかなか死ねませんよ」

突然そう言われて、ぼうつと男を見ていた少女ははっと正気に戻った。

戸惑い、大きな絆創膏の貼られた手首を見つめる。

「……………どうしたら…死ねますか……………」

先ほど店に入るとき、自殺屋と書かれた看板が立っていた。ここが自殺屋という店ならば、自殺する方法を教えてもらえるのではないかと、少女は小さな声で途切れ途切れに男に尋ねた。

その言葉に、男は表情を変えない。

「自殺をするのですか？」

男の問いに、一瞬間を置いて頷く。途端に体が震えだした。

「…自殺の方法をお教えするのは簡単ですが、まずは貴女がなぜ自殺を考えているのか話して頂けませんか？ここは自殺をお勧めする店ではありません」

「え？」

「ここは、自殺を考える方に、自殺とはなんなのかを知っていたただく店です。貴女がいつたい何の理由で自殺を考えていらつしやるのか。自殺を選ばずに済む道はないのか、一緒に考えてはみませんか？」

### 三冊目＋第三章：規約（前書き）

長く更新できずにいたことをお詫び申し上げます。

またしばらく間が開いてしまつかもしれませんが、少しずつ執筆していきたいと思いますので、お付き合い頂ければ幸いです。

### 三冊目＋第三章：規約

薄暗い店内に、また同じく暗くはあるものの、明かりが灯った。

店主は本棚から本を一冊取り出し、カウンターの中间にあるイスに座った。その手に持たれた本は、およそ300ページほどであろう。

黒いハードカバーに、白抜きで「自殺とは」と書かれた表紙。作者名や出版社は書かれておらず、シンプルすぎるほどの本である。

少女はただ黙ったまま男が話し始めるのを待った。

「さて、まずはこの店の説明を致しましょう。この店の名前は、自殺屋。先ほども言ったように自殺を考える方に、自殺とはなんなのか知っていただくための店です。ご覧のとおり、多くの書物を置いています。すべて自殺に関する本ですが、これらをあなたに貸し出します」

「貸し出す？」

「はい、本の貸し出し規則については、また次にお話しいたしますね。この店をあなたに貸し出します。あなたが借りている間、この店はあなただけのものです。好きなだけ時間をかけてくださって構いません。ですが、必ずすべての本を読みきってください」

そこまで聞いて、少女はふと店の奥を見遣った。電気の点っていない暗闇の奥に、どれだけの本が置いてあるのか、想像もつかない。

だがおそらく、見えないすぐそこで終わっているはずはないだろう。

「もしも、読みきらない時はどうなるんですか？」

「人間に永遠の時間はありません。読みきらずにあなたの寿命がくるか、もしくは」

それまで表情を変えなかった男の顔が、わずかに笑う。

「あなたが自殺をするかです」

ぞくりと体を寒気が襲った。そんな風に言われて、なくなりかけていた不安が一気に増してくる。

「先ほども言ったように、ここに置いてある本はすべて自殺に関する

る本です。これらを読んで、あなたが自殺を考え直すか、それとも影響を受けて自殺をしてしまうか。それは私にもわかりません」「無責任な、と少女は一瞬思った。しかし考えてみれば、誰かがいつか自殺をするかもしれない、ということ、つまり人の未来など誰にもわかるはずなどないのだ。

店主はさらに話を続ける。

「しかし、ここにある本を読み続けることで、少しはあなたの気も紛れるのではないですか？それと同時に自殺についても知って頂ける。あなたがしようとした行為が、どんなことなのか」

指さされて治療をされた手首を見る。そこがじん、と熱くなる感じがした。

自殺というものが、どういうことなのか。それをすること、いたい世界はどう変わるのか。否、変わるはずがない、と少女は小さく首を振った。

誰にも必要とされていない、むしろ邪魔にされている自分がいなくなったところで、この世界は変わるはずはない。

時間が止まるわけでもなく、世界中の人間が泣いて悲しんでくれるわけでもなく。何も、変わらないのだ。ただ、自分がいなくなるだけ。何億という中から、たった一人が、消えるだけなのだ。

「死にプラスは有りません」

その一言に、少女はゆっくりと再び店主を見た。目深に被った帽子から、漆黒の瞳がこちらを見つめる。

「誰かがこの世界から消えること、死でプラスは生まれません。生み出されるものは、悲しみと、絶望、そして後悔のみです」

そこで微笑んだ男の表情が、少女には哀しく見えた。

「もう少し知ってはみませんか。あなたが進もうとしている道は、どんなものなのか。私はそのお手伝いを致します」

少女は店主の手に持たれた本を見つめた後、店主に視線を戻し、静かに頷いた。



「まずは本を借りるときの注意を致しましょう。たくさんあります  
が、覚えて帰ってくださいね。まず、本は必ず棚の左上から順に借  
りて読んでいってください。一冊も飛ばしてはいけません。また、  
本を読むときも、一文字も飛ばさずに読んでください。本は一度に  
何冊借りていただいても構いません。好きなだけ借りていってくだ  
さい。返却期限はございません。何年、何十年でも借りていて構い  
ません。ですが、必ず返却してください。もしも本を借りたままあ  
なたが亡くなられたときには、私が回収に伺います」

少女は店主の話を聞き、素直に頷いた。いくつか疑問に思ったこと  
もあつたが、それがこの店のルールである以上、従うしかないのだ  
と自然に受け入れた。店主は再び口を開く。

「次に店自体を借りることに關しての注意です。この店については、  
絶対に誰にも話さないこと。自殺屋の本を他人に見せないこと。こ  
の二点を必ず守ってください。おっと、それから」

忘れていた、と笑いながら、店主はカウンターの引き出しから白い  
カードを一枚取り出した。真っ白なその真ん中に、黒枠で四角が  
描いてある。来るように言われて、少女は立ち上がり、カウンター  
をはさんで店主の真向かいに立った。

「これに触れて、あなたの名前を思い浮かべてください」  
言われた通りにすると、カードの黒枠の中に少女の名前が浮かび上  
がった。思いがけない出来事に、思わず一度手を離す。

「これでこの店はあなたのものです。このカードは紛失しないでく  
ださい。折つたりしてもダメですよ。さて、説明が長くなりました  
が、注意事項はこれで以上です。今話したことを、ひとつでも破つ  
たとき、あなたの身の保障は致しません。ご了承ください」

淡々と説明を終えると、店主は立ち上がり、少女の手を取ってカー  
ドを握らせた。ひやりと冷たいカードの感触が、手の平から腕を伝  
つて、脳まで届く。少女は絆創膏の貼られた手でカードを握りしめ、  
ごくりと唾を飲みこんだ。

「さあ、とりあえず今日はお帰りなさい。きっとあなたのご両親が

心配していますよ」「  
にこりと微笑んだ店主の顔を最後に、少女の意識はぷつりと途切れ  
た。

三冊目 + 第四章：一冊目（前書き）

更新が遅くなりましたこと、お詫び申し上げます。

### 三冊目 + 第四章：一冊目

少女は温かい布団の中でゆっくりと目を開けた。

家の中は静まりかえり、外を飛び回る雀たちの声がよく聞こえる。

壁に目を遣ると時計の針は12時過ぎを指していた。

両親は仕事に行っている。久し振りに穏やかな平日だと、少女はぼんやりと天井を眺めた。

タバのことを一つずつ思い出ししていく。

いつものようにいじめの標的にされ必死に逃げたこと、自殺を考えたこと、自殺屋という店に、出会ったこと。

そしてその店を借りたこと。いつの間にか家に帰ってきていたこと。思い返してみれば、まるで夢のような出来事だった。

自殺屋などという聞いたことも見たこともない店が、存在したのだ。そこまで考えて、少女は首を机の方向に向け、その上に積んである3冊の本を見た。

静かな部屋の中で、その本の周りは一際静かで重い雰囲気にも包まれている気がする。

考えてみれば、自殺屋も、あの店主も同じ雰囲気を持っていた。静かな家が立ち並ぶ中に、一層静かな佇まいの店。その中にいた、店主。彼もまた静かな、少し怖いような悲しいような雰囲気も纏っていた。形は同じ人間なのに、どこか異世界の生き物のような。

それでもその目は優しくかった。おそらく少女が今まで出会ってきた生き物の中で、一番。

布団の中から腕を出してじっと見つめる。手首の絆創膏は、タバ店主が貼ってくれたものである。

そつと剥がしてみると、傷痕は残っているものの、血は完全に止まり皮膚はくっついていていた。それでもこれは確かに、自殺をしようとした証拠。

いじめられる苦しみから逃げ出そうとした、証拠なのだ。

「……………」  
少女はゆっくりと体を起こし、ベッドから出て立ち上がった。  
机の上の本へと向かい、1冊の表紙を片手で開く。そこには一枚の紙切れが挟まっていた。何かと思いめぐるも、まっしろである。  
しかしよく見ると、何かが書いてあった跡がある。年月が経ち、文字が消えてしまったのだろう。

「……………名前…かな……………」  
かなり薄くなつてはいるが、そこに書いてあるのは誰かの名前らしかった。おそらく男性の名前だろう。これが一体何なのかわからなかったが、今度店に行つたときに店主に聞いてみようと、少女はその紙切れを元に戻した。

少しの空腹を感じて、少女は部屋を出てリビングに向かった。歩いていると少々足首が痛い。昨日逃げている間にひねつたのだろう。人間とは何かに必死になっていると、痛みなど感じないものなのだ。

リビングに入り、そこからつながっているダイニングに入ると、テーブルの上に二つの皿と書置きが見つかった。皿で固定されている書置きには、母親の字が書かれていた。

「体は大丈夫？目が覚めたら食べてください。今日は少し帰りが遅くなります。お父さんも出張です。何かあつたら電話してください」  
少女が幼い頃病弱だったせいもあり、母親は過保護だった。少し熱があるだけでも必要以上に心配し、頭が痛いなどといえは病院に電話をする騒ぎなのだ。普段は心配しすぎではないかと思うが、今日はその過保護に少し感謝した。  
用意されていた食事を電子レンジで温め直し、空腹を満たしたあと、少女はまた自室に戻った。

椅子に座り、自殺屋の本を手取る。そして、硬い表紙をゆっくりとめくつた。

『自殺とは』

自殺 「名」自分で自分の命を絶つこと 他殺

自殺とは

自らを殺すと書き、そのままの意味の言葉である。

自殺とは

自らという人間を殺める、殺人である。

自殺とは

取り返しのつかない行為である。

自殺とは

悲しみを生み出す行為である。

空を見上げて考えて見てほしい。

あなたは自分を殺したいのだろうか。

### 三冊目＋第五章：紙片（前書き）

毎回更新が遅く申し訳ありません。

途中で執筆をやめるつもりはありませんので時間はかかるかもしれませんが完結までお付き合いいただければ幸いです。

### 三冊目＋第五章：紙片

冷たい雨が静かに降り続いていった。

店のガラス戸は雨で濡れ、時折吹く風でかたかたと音をたてる。店主は少しだけ戸を開けて顔を出し、灰色の空を見上げた。

「……今日は寒いですね」

足元にすり寄ってきた小さな黒猫。全身雨に濡れて震えている。

店主はその猫を抱きあげ、店の中に戻った。

日が沈み辺りが暗くなってきた頃、店主はカウンターに向かい半分ほど残っている蝋燭に火を点けた。蛍光灯とは違う、ゆらゆらと揺れる不安定な明かりが、カウンターの周囲と店主を照らす。その明かりをカウンターの角にずらし、静かに椅子に腰かけた。炎が、揺れる。

こつん

店主がカウンターの引き出しを開けると、中で一つのガラス玉が転がった。

少しの光を反射して、透明に光る。それを取ろうと手を伸ばしたとき、店の入り口が静かに開いた。

入ってきたのは、少女。

「おや、いらっしやいませ」

店主は言いながら蝋燭をふつと吹いた。蝋燭はゆらりと揺れて名残惜しそくに煙だけを残して消える。

本を手に抱えて入ってきた少女は少し首を傾げた。

「消してしまつたら何も見えないですよ」

確かにいきなり明かりを失った店内は少しの光も持たない暗闇である。しかし店主は椅子に腰かけたままで動かない。

「ええ、すぐにつきますから」

店主が静かにそう言うと、自然と店内に明かりが灯った。天井につ



いている蛍光灯だが、それは一般の建物のものとは違い、あまり明るくない。しかしそれが丁度いい雰囲気を出している。

「今日は来られないのかと思いました。こんな夕方に出かけて大丈夫ですか？」

店主が笑ってそう言うと、少女はカウンターに近づきながらつられて控え目に笑ってみせた。

「実は来ようと思ってなかったんですけど、気がいたらこれを持って家を出ていたんです」

言いながら、手に持っている本の束を少し掲げてみせる。

それを聞いた店主はまた柔らかく笑って、一度頷いた。そしてカウンターの向いのソファを示す。

「どうぞ座ってください。今次の本を持ってきますね」

「あ、あの、その前にひとつ聞いてもいいですか」

椅子から立ち上がるうとしていたのを少女の声で止め、店主は上げかけた腰を椅子におろした。きしりと軋む。

「いいですよ。なんででしょう」

少女は黙ってカウンターに本を置き、一冊の表紙を開いた。そこに挟まっているのは、一枚の古びた紙片。

「これ……この本に挟まっていたんです。なんの紙なんでしょうか。人の名前が書いてあるみたいなんですけど」

店主は少女から紙片を受け取りしばらく見つめてから、ああ、と声を上げた。

「ずいぶん懐かしいものが出てきましたね。これはもう30年ほど前に店を借りた方のお名前です」

「30年前？そんなに前からこのお店ってあるんですか」

少女の問いに、店主はただ静かに笑って応えた。少女は何か聞いてはいけない事を聞いてしまったのかと、口を噤んだ。

蛍光灯の光がカチカチツと音を立てて揺らぐ。店の扉が風に吹かれてひと際大きく鳴った。

「…この方はご病気でした」

「病気？」

「ええ、脳の障害で……ほんの数時間前のことを忘れてしまうので  
す」

言いながら店主はカウンターの椅子から立ち上がり、本棚に向かって歩を進めた。こつこつと靴の音がメトロノームのように一定のリズムで鳴る。その音が棚の前でぴたり、と止まり、代わりに店主の低い声が店内に響き始めた。

### 三冊目＋第六章：繰返

よく晴れた秋のある日。その男は初めて自殺屋を訪れた。

店主は手に竹箒を持って店の前を掃除していた。かしゃかしゃという音が、静まりかえった古めかしい住宅街に響く。

ふと、一人の男と目が合った。20代後半ほどの男が、ただぼうつとこちらを見つめている。店主は少し会釈をした。しかし、男は何も反応せずにただ、ぼうつとしてている。

竹箒を店の壁に立てかけ、店主は男の方へ歩み寄った。目の前まで来ても、男は反応しない。

「どうか、なさいましたか」

店主が声をかけると、その男は5秒ほどしてからようやく目の焦点を店主の顔に合わせた。不思議そうに首を傾げ、目を見開く。

「……………ここは、どこですか」

初めて男が発した言葉はこれだった。店主は笑って、問い返す。

「道に迷われたのですか？」

その問いに、男はまた少しぼうつとしてから、ゆるりと首を横に振った。

「迷った……………のでしょうか。すみません、自分がどこから来たのかもわからないんです」

おずおずと答えるその男の手に、何か握られているのを店主は見つけた。すみません、と一言断つてから、それに手を伸ばす。

小さなプラスチックの袋に入った紙には、住所らしきものと、名前が書いてあった。迷子札のようである。

店主は少し考えてから、男を店の中へと招いた。

「私の店へどうぞ。地図を書いて差し上げます」

男はまた少しぼうつとしてから、こくりと頷いた。

「どうぞお掛けください」

店主がソファを勧めると、男はまた少し考えるように止まってから、ゆっくりと腰をおろした。革製のソファが、音を立てる。

男はきよるきよると店の中を見回し、壁沿いの本棚に目をとめた。瞬きも忘れたように、じっと、その本棚を見つめる。

店主はカウンターの途中でさらさらと地図を描き上げると、迷子札と一緒に男の手の中に握らせた。店主が手に触れても、男はまったく本棚から目を離さない。

「……自殺……」

ぽつりと男がつぶやいたのを聞いて、店主は少し驚いてから、笑った。

「目がよろしいですね。あの文字が見えるのですか」

「……自殺、したいんです。忘れる前に……自殺を……」

本棚を見つめたまま、虚ろな目でつぶやき、男は気だるそうに溜息をついた。「忘れる前に」という言葉に、店主は軽く首を傾げる。

「忘れてしまうのですか」

「……自殺がしたいんです……僕は……すぐにこの気持ちを忘れてしまう……気持ちだけじゃない。何があったのかも、自分が何をしていたのかも、全部忘れてしまうんです。忘れるのが怖いんです。でも、忘れてしまえば、怖かったのも忘れてしまう……僕は、こんな状態で生きていたくないんです……」

男の手がぎゅっと握られ、手の中の迷子札と地図が、苦しそうにくしゃりと鳴った。

店主が黙ったまま男の前にしゃがんでいると、突然男は立ち上がり、本棚の前に迷いなく歩いて行った。

一番端の棚の前で立ち止まり、じっと本のタイトルを見つめる。一番左上の本から視線を動かし、徐々に右へ、そして下へ向かっていく。しかし本棚の真ん中まで来たところで、ふと男の視線が止まり、また一番左上に戻ってしまった。それを、何度も繰り返し返す。

何度も、何度も、男の視線は左上から棚の真ん中までを行き来した。5分ほどそれを繰り返したあと、男は振り返り、店主に問うた。

「ここは、どこですか」

「ここは自殺屋です。……どうぞ、読んでくださってかまいませんよ。貴方がしたいと思っっている自殺というものがなんなのか、そこには書いてあります」

「自殺……？ああ、そうですね。自殺……」

男は小さく溜息をついてから、一番左上の本に手を伸ばした。ことりと音が鳴って、本が男の手に、落ちるように移動する。

ソファに戻ることはせず、その場に座り込んで男は本を読み始めた。何も言わず、ただ一心に。

店主も何も言わず、カウンターの椅子に腰かけた。

一定の時間で、ぱたり、またぱたりとページの捲られる音だけが店の中に響いた。

男は黙々と本を読み続けている。また、店主もカウンターの途中で本に目を遣っていた。

しかし突然男が立ち上がり、すたすたと店主の方に向かっていく。カウンターの目の前まで来て、男は言った。

「ここは、どこですか」

店主は本から目をあげ、男の顔を見てから答えた。

「ここは自殺屋です。貴方は2時間ほど前にこの店を訪れて、その本を読んでいたのでですよ」

「……ああ、そうでした」

店主が指さした本に目を落とすと、それを持っていたことを思い出したようにじつと本を見つめ、男はソファに腰をおろした。

そして一度本を閉じ、また最初のページを開き、最初から読み始めた。

店主もまた再び、本に目を戻す。

ぱたり、ぱたりと男は本を読み進めていく。そのページが本の真ん

中を過ぎたところで、男は声を上げた。

「ここは、どこですか」

「ここは自殺屋です。貴方は3時間ほど前にこの店を訪れて、その本を読んでいたのですよ」

「……………ああ、そうでした」

そしてページは、また最初に戻る。繰り返し、繰り返し。

このやりとりを5度程繰り返して、ようやく男は一冊を読み切った。本を閉じて、問う。

「ここは、自殺屋ですか」

「そうです、ここは自殺屋です」

「ああ……………そうですね。また来ます」

男はカウンターの上のペンで、ソファに落ちていた地図に自殺屋、とメモをすると、それと迷子札を手に握りしめ、店を後にした。

「お気をつけてお帰りください」

店主は出ていく男を見送ってからソファの上の本を棚に戻し、店の奥へと姿を消した。

### 三冊目＋第七章：涙

2日後、男は再び自殺屋を訪れた。

店主が店の扉を開けると、目の前に男がぼつと木のよう立っていた。

「いらつしやいませ。どうぞ」

店主が微笑んで言うと、男はじつと店主の顔を見つめたあと、こくりと一度頷いて店の中に足を踏み入れた。

中に入った男はきよろきよろと店の中を見まわし、本棚に向かった。本棚の前で足を止めて店主を振り返る。そして、口を開いた。

「ここは、どこですか」

店主はまっすぐに男の顔を見て答える。

「ここは自殺屋です。あなたは2日前にこの店を訪れたのですよ。

……覚えていますか」

店主の問いに、男はしばらく自分の足元に視線を落としたり店主の顔を見たり店の中を見回したりをしたあと、ああ、と小さく声を上げて頷いた。そして、黙って本棚に向かう。店主は黙って男の背中を見つめる。

男は本棚の一番左上の本を手に取り、その場にしゃがみこんで表紙を開いた。数ページ進んではまた最初に戻り、それを何度も繰り返す。

店主は黙ってその様子を見ていた。静まり返る店の中に、捲った時に紙が擦れる音だけが、妙に大きく響く。

一定のリズムで繰り返されていたその音が、ぴたりと止んだ。店主は男に歩み寄り、隣に座り込んだ。

「どうなさいました」

「……………自殺が…したくて……………なんで僕は、ここにいるんでしょう」  
男はそう呟くと、持っていた本の表紙をこつこつと爪で叩いた。手

から本を落とすように離す。店主が本を拾い上げると、男はそれを目で追いながら自分の左手の甲に手を伸ばした。

爪を立て、力を入れる。ざりざりと鈍い音を立てながら、皮膚が引き千切られていく。男の爪の間に削られた肉と滲んだ血が蓄積し、みるみるうちに両手が血に染まった。

それでも男はその行為をやめようとはしない。店主は黙って手を伸ばし、男の右手を止めた。

自分の手を掴んだ手をたどるようにして、男は店主の顔を見る。そして、口を開いた。

「こうすれば、忘れないんです。痛みが、自分が何を考えていたのか教えてくれる。何か残さないと、忘れてしまつんです」

「……………」

「こんなことを繰り返さずにそのとき死んでしまえばいいんですけど……わかっていても死ねないんです。なぜなんでしょう」

男はぼつと左手を見つめたまま、震える声で呟いた。それは、店主への問いなのか、自分自身への問いなのか。

気だるそうにため息をつき、男はその場に横になった。店主は立ち上がり店の奥へ姿を消すと、箱を持ってすぐに戻ってきた。横たわる男のそばに座り、左手の治療を始める。

黙って手当てをしていた店主は、ガーゼを張り終えると、男から視線をはずしたまま声を発した。

「死にたいと思っていても死ねないのは、あなたが心のどこかに、死にたいという気持ちと一緒に『生きたい』という気持ちも持っているからですよ。その気持ちが完全に消えてしまつまでは、生きてみませんか」

男の目から涙がこぼれた。理由のわからない涙だったが、男はそれを拭くこともせずに横たわつたままぼろぼろと涙を流し続けた。



### 三冊目＋第八章：記憶（前書き）

読んでくださる読者様に感謝を申し上げます。

前作の感想もたくさん頂き、いつも励ましになっています。あいか  
わらず更新は遅いですが、最後までお付き合い頂けたら幸いです。

### 三冊目＋第八章：記憶

男は毎日14時に店を訪れた。

決まった時間に訪れて、決まった時間に帰って行く。

「ここは、どこですか」

「ここは自殺屋です」

そんなやりとりも決まって男が訪れた時に行われた。

男は店に来て、まずカウンターに立ち寄る。カウンターの隅に置かれたメモを確認するためだ。

まだ何も書かれていないメモの横には、男がどこまで本を読んだのか書かれたメモが束になっている。

男が忘れてしまうからと、店主が考えて置いているものである。男はメモをしばらく見て前回読んだ本のタイトルを覚えてから本棚に向かう。前回読んだものは左から3つ目の棚の上から2段目一番左の本。本来ならその隣の本を取りに行くべきところを、男は一番左の棚に向かった。

手にとったのは、左上の一冊目の本。

この行動は毎回のものだった。どんなに先の本を読み終わっても、その次に行く前に一番最初の本を開く。店主はカウンターに座ったまま、男に声をかけた。

「いつもその本をお開きになりますね。何か気になることでもございますか」

店主の問いかけに振り返ると、男は手に持った本を棚に戻し、しばらくの沈黙の後返事をした。

「……確認するためです」

その返事の意味はよく理解できなかったが、店主は唯、そうですねと答えて読み途中の本に目を戻した。

夕方になり、男はメモに今日読んだ本の置き場所とタイトルをメモして帰っていった。ソファに置かれた本を棚に戻すために、店主はカウンターから立ち上がる。本を棚に戻した帰りかけ、一番左の棚、一冊目の本を開く。表紙を開いたそこから、一枚のメモが滑って床に落ちた。拾い上げてみると、そこに書いてあるのは名前。あの男の名前である。

男は確認するためだと言っていた。

記憶が曖昧なこと、忘れてしまうということ。いつどんな記憶が消えるかわからない恐怖。それは本人にしかわかりえないことだろう。もしかしたら、いつか自分の名前さえも忘れてしまいかもしれない。そんな不安を抑えるために、このメモを毎回見て確認しているのだろう。自分自身の名前ではなく、まだ自分が自分を覚えていることを。

店主はメモを戻し、本を棚にしまって店の奥に姿を消した。

「人間の記憶というのは、存外適当なものです」

店主の声に、少女は静かに顔をあげた。店主の表情は、どこか寂しいような、悲しんでいるような、それでも、微笑んでいる。

「はつきり覚えているようで、そうでもなかったりする。辛いことほど、強く記憶に残り、嬉しいことほど、段々とかき消されてぼやけてしまう。それは辛い経験のほうに心を受ける衝撃が大きいからです。どんなに嬉しかったことも、辛いことがあればそれに塗りつぶされてしまいます。それも悲しいことかもしれません。けれど、彼は辛いことすらも、覚えていられなかった。彼には、苦しんだ記憶も、喜んだ記憶も、何も残らない。それは悲しみというよりも、恐怖に近かったのでしょうか。何を思っても、いつか全て消えてしま

う」  
少女はカウンターに置かれたメモを見つめて、ただ黙っていた。店主の話に聞き入っているというよりも、何を言っているのかわからない。

記憶が消えてしまう。それもぶつりと、糸が切れるように突然。いつ忘れるのかわからない恐怖。そしてその恐怖さえも忘れてしまうということ。そんな状態で生き続ける、苦しみ。少女には想像がつかなかった。

「……その人、どうなったんですか」

ようやく出てきた言葉で、店主に問う。店主はメモの文字に触れながら、言葉を返すためにゆっくりと口を開いた。

「亡くなりました」

「自殺したんですか」

「いえ、ご病気で。結局最期まで彼の記憶は曖昧なままでした。ですが、一つだけ彼が最後に思い出したことがありました」  
少女はなんだろうかと首を傾げる。

「彼の奥様のことです。彼が記憶を失うようになったきっかけだったそうです。奥様を病気で亡くし、それ以来彼の記憶障害が起こったようです。それすらも忘れていたのに、彼は最期にそれを思い出した。奥様が迎えにきたからかもしれないですね」

少女は店主の言葉を複雑そうな表情で聞いていた。それは男にとって幸せなことだったのだろうか、考えた。

それはどうなのか、男以外に知ることはできない。

「さきほど嬉しかった記憶は、辛い記憶にかき消されてしまつて言いましたが。当然逆もあります。脳に焼き付いていた辛い記憶が、以外とあっさり消えてしまうこともあります。それには、長く生きること、時間が必要ですがね」

店主は静かに笑って、メモをカウンターの引き出しの中にした。

### 三冊目＋第九章：落（前書き）

非常に長く更新を停滞させてしまい、待っていて下さった方には申し訳ありませんでした。

私自身余裕がなかったことと、執筆意欲が湧かなかったことが原因です。

これからはまた少しずつ執筆していきますので、お付き合い頂ければ幸いです。

### 三冊目＋第九章：落

少女が自殺屋に通い始めて半年が経とうとしている。新学期になり、少女も三年になっていた。

桜はもう散ってしまったが、ここ数日は天候が悪く、暖かい日は少なかった。

学校に通う少女の心もまた、暖かくなることはなく、相変わらず寂しく冷たい風が吹くばかりであった。二年間で築き上げられた自分の立場というものは、学年が変わりクラスが新しくなった程度ではそう簡単に変化しないらしい。

少女をいじめていた主な生徒は別のクラスになったが、休み時間や放課後になれば、少女の前に現れ何かといやがらせをしていく。貴重な休み時間にわざわざ離れたクラスへ来たり、帰りを見計らって邪魔をしに来たりと、そんなに暇なんだろうかと思われてしまう。

そこまでしつこくいやがらせを受けていた少女だったが、学校へ行くことは辞めず、最近ではいじめに対してもそこまで悩まなくなっていた。自殺屋に行くという日課ができてからのことだった。

初めのうちは本を読み進めるのもそこまで早くなかったため、数日に一回店に足を運ぶ程度だったのだが、どんどん自殺屋の本にのめり込み、今では一日に少なくとも二冊は読み切って夕方には店に向かうようになっていた。

今日も早く自殺屋に行こうと、帰路を急いだ。小走りに家に帰り、玄関を開けて部屋に駆け込む。机の上に用意しておいた三冊の本を鞆に詰め、手早く私服に着替えて部屋を出た。玄関で靴を履いていると、後ろから声をかけられた。思わぬ事にびくりと体が跳ねる。

「何も言わずに帰ってきたと思ったならまたすぐに靴を履いて。どこに行くの？」

振り返ったそこにいたのは母親であった。そういえば今日は母親の

仕事が休みだったんだと、そこで思い出した。

「あ……えつと………ただいま」

どこに行くのかを問われて何と答えたら良いか悩んだ少女は、帰ってきたときに何も言わなかったと咎められたことに対して返事をした。しかしやはり母親が欲しかった返答ではなかったのである。変な顔をされてしまった。

「まあ、なんだか最近では元気みたいだからいいけれど。あまり遅くならないでね」

少し困ったような顔をしつつも笑みをみせてくれた母親に、少女はほっとした。はい、と一言返事をして、靴を履く作業に戻る。

靴を履き終えてドアノブに手をかけようとしたとき、母親があつと声をあげた。何かと思い、振り返る。

「そうそう、でかけるなら少しお遣いを頼まれてくれない？俊一伯父さんの家は知ってるわよね？」

「俊一伯父さん？わかるけれど」

「お父さんがこの間会ったときに渡さなきゃいけないかったもの渡し忘れててね。少し遠いけれど大丈夫？」

俊一というのは、父親の兄にあたる人だ。何度か家に遊びに行ったことがあるが、父とはあまり似ない、ふくよかな人だったと記憶している。もつとも最後に会ったのは小学生の時なので、今は少し違うかもしれないが。

そんなことを考えながら、少女は一度頷いた。遠いといっても電車で二十分程の距離だ。どこに行くのか問い詰めずに済ませてくれたことへのお礼に、その位の遣いはどうということもないと思った。自殺屋へ行くのは少し遅れるかもしれないが、店主はいつどんな時間でも店を開けて待っていると言っていたので問題はないだろう。母親が大きな封筒と財布を持って戻ってきた。何が入っているのかは知らないが、外から触った感じで何かの書類と分かったので、折れないように鞆に入れる。本で折れ目がついてしまわないかと少し心配もしたが、母親の目の前で本を出して入れ直すわけにもいかな

いので、そのままにしておいた。

少女が封筒をしまっている間に、母親は財布から二千円を取りだしていた。

「それだけ持っていくわけにもいかないから、途中で何か買って行って。伯父さんはビールが好きだからビールと、あと何かお菓子でも」

届け物をするだけなのにそんなものが必要なのかと思いつながら、二千円を手を取った。これが大人の常識なのだろう。

「あとこれも。お遣いしてくれるから」

別で渡されたのは、千円だった。貰えるとは思っていなかったの少し戸惑ったが「ありがとう」と一言言って受け取った。

母親に見送られ、家をおとにする。千円を貰ったはいいが、特に今欲しいものはないなと考えながら駅に向かって歩き出した。ビールと菓子を購入するために駅前のスーパーに立ち寄る。夕方ということもあって、店内は賑わっていた。

ビールと適当な菓子折りを手にしてレジに向かう途中、ふと立ち止まった。店の一角で、シュークリームを売っているのを見つけたからだ。甘い匂いがする。シューの中はカスタードだけでなく、色々種類があるらしい。

少女は少し悩んでから四種類のシュークリームを選び、購入した。自殺屋に持って行こう。あの店主がはたして甘いものを食べるのかどうかは知らないが、たまには少し変わったことをしてみようと思った。あまり良い顔をされなければ、持ち帰って自分で食べれば済むことだ。

久しぶりに会った伯父は、変わっていないなかった。ふくよかな体は相変わらずだったし、よく笑うところも記憶と同じだった。

封筒と手土産を渡すと必要以上に礼を言われ、少し上がるようにと誘われたが、早く自殺屋に行きたいと思い、丁寧に断った。

それでも玄関で話し込んでしまい、予定よりは幾分遅れた。話し込



んだというよりは、一方的に話されたと言った方が正しいかもしれないが。

シークリームの中身が溶けて柔らかくなってしまうていないかと心配しながら、少女は足早に駅に向かった。

駅前の時計はもうすぐ七時を過ぎることを示している。店に着くのは何時になるだろうかため息をついた。

改札を通った時、少女はどきっとして立ち止った。少し向こうに、見覚えのある顔があった。少女をいじめている数人のうちの主犯ともいえる人物、羽嶋である。

よく見ると一緒にいるのは、いつも少女をいじめてくるグループの二人だった。なぜこんなところにいるのかわからないが、今日は相当運が悪いらしい。

あの三人に見つかつたらまずい。そう思い、少女はそちらを見ずに走ってホームに向かった。階段を駆け上がり、自動販売機の陰に隠れるように立つ。

あと数分しないと乗りたい電車は来ない。早く来てくれと心から祈った。

ブツツと音がして、すぐに構内にアナウンスが響いた。

「車両点検の影響で5分程遅れております。ご迷惑をおかけして大変申し訳ありません」

最悪だ。

形式的に二度繰り返されるアナウンスを聞きながら、少女は自動販売機にもたれるように座り込んだ。

先程の羽嶋達の様子ではなにか話しているようだったので、まだしばらくそのまま話していきたくれと祈るように手を強く組み合わせた。構内にある時計をじっと見つめる。まるで世界がスローモーションになったのかと思うほど、時計の針は遅かった。

時間が一分、また一分と進む度に、心臓の規則的な音が早くなるのがわかった。

こんな時間にも関わらず構内の人はそこまで多くなく、少女を気に

かけるものもない。

いつそこから消えてしまえたらと、そうすればこんな恐怖から逃れられるのにと少女は荒くなりそうな息を抑えて思った。

「あんた何してんの」

時間が一瞬止まった。止まったのは少女にとっての時間だが。

しゃがみ込みうずくまっていた少女の目の前に、あの独特の蔑むような目をし、にやにやと薄笑いを浮かべる羽嶋が立っていた。両隣に他の二人もいる。

逃げようと立ち上がったが、走り出すよりも腕を掴まれるほうが早かった。

掴まれた箇所から全身に寒気と恐怖が走り、振り払おうと腕を思い切り振り上げた。

「離して！」

しかし元々身体の強くない少女の力が健康な、しかも身長の高い羽嶋に敵うはずがない。抵抗も虚しく自動販売機に体を叩きつけられてしまった。

勢いで頭も強く打ってしまい、目の前がぐらぐらと揺らぐ。

そんなこともお構い無しに、羽嶋は少女の髪を乱暴に掴んで引っ張り上げた。

「あんたさあ、会っていきなり逃げようとするってどういうこと？ 挨拶くらいしたらどうなの」

何が挨拶だ。少女は羽嶋の顔を睨みつける。

その反抗的な視線が羽嶋の怒りの琴線に触れたのか、髪を掴んだまま頬を思い切り殴られた。頭の方でぶつぶつと音がして、髪が何本か切れたな、と少女は意外と冷静に思った。

見つからないよう祈り怯えていたさっきまでが嘘のように、頭の中に恐怖は無くすっきりしていた。さっき自動販売機にぶつけた瞬間からだろうか。

そしてその頭の中で冷静に、考えた。

もうすぐ電車が来る。

タイミングを図り争った勢いに見せかけて、線路に突き落としてしまえば。

そうして羽嶋がいなくなれば

こんなことをされなくなる。

普段ならば思い付かないような考えが、まるで準備されていたかのように、この時を待っていたかのように、少女の頭を占領した。

いなくなればいい。自分を苦しめる存在が。その存在の中心が。

「まもなく四番線に電車到着致します。電車遅れまして大変ご迷惑をおかけ致しました。」

もうじき電車が来ることを告げるアナウンスが聞こえた瞬間、少女は髪を掴んでいる羽嶋の腕を力いっぱい引っ張った。アナウンスに多少気を取られていたのか、数本の髪を犠牲にしただけで羽嶋の腕は少女から離れた。

右手に持っていた鞆とシユークリームを地面に落とすように手放し、両手で羽嶋の体を線路側に突き飛ばす。

羽嶋は突然のことによるけながらも、少女の細い手首を掴んだ。体勢を崩した羽嶋に引っ張られ、少女も線路ぎりぎりまでよろけていく。

他の二人は悲鳴を上げるだけで手は出してこない。ホームにいた疎らな人達も、興味深そうに少女達を見はしたが、止めには入らなかった。

電車が小さく視認できるところまで来ている。

少女はもう一度と、羽嶋の肩を掴み引いた。

「ふざけんな！」

怒りの限界に達したらしい声で叫び、羽嶋は少女の胸の辺りを強く押した。

後ろによろけ、羽嶋から体が離れたが、少女は諦めなかった。今度こそ突き落としてやる。そう思い踏み込もうとしたそこに、地面は無かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6606b/>

---

自殺屋-新たなる客人-

2010年10月19日01時55分発行